



もう、ご覧になりましたか。奈良の平城宮址に復現された平城京大極殿。去年の秋、広大な宮址のかなたに、突如出現した朱色に輝く建造物を発見した時、僕は不思議な感覚に陥りました。空漠の野のかなたに出現した煌びやかな輝き、昨日までは何もなかったところに次々に建設される華麗な建物。千三百年前にこの地に居た人々は、きっと僕と同じ思いで、目を見張ったのではないのでしょうか。

10年の歳月をかけて復元された大極殿は、東西44米、南北20米、高さ27米、総工費180億円、内部に、朱雀、玄武、白虎、青竜の四神などを描き、天皇が座っていた高御座(たかみくら)の復元品などを展示、4月の「遷都祭」の開幕に合わせ、公開されることになっています。

待望の平城遷都千三百年祭。「人類の進歩と調和」 じゃなかった、「花と緑の」 でもなかった、「はじまりの奈良、めぐる感動」これですよ。当初企画されていた平城宮跡を会場にした博覧会的記念事業は、文化財保護ということもあって、奈良県各地で開かれる催しに変わったようですが、大極殿と並ぶもう一つの目玉、「遣唐使船の実物大復元」は、計画通り、去年の秋から建造が進められています。こちらは総工費2億円。まあ、事業仕分けで勇名を馳せた運舫さんも、この程度なら目をつぶってくれるでしょう。もっとも、本物なんて誰も見たことないんだから、出来るだけ小さく無駄なものは省いたら ぐらいは言われるかもしれませんが。

それからシンボルのゆるキャラ「せんとくん」。可愛くないとか、仏さんにツノが生やすとはケシカランと言われましたが、まあ、元々が拘らない性格で、元気で、イベントを盛り上げてくれていますよ。

で、僕も奈良県人として何かお役に立とうと決意して、でも、まだなんといつても平城宮址は寒いし、実際のイベントが開催される4月24日から11月7日ですから、とりあえずこの小文で祭典に貢献しようと考えた次第です。

平城京は、朱雀大路を中心に東西それぞれ四坊、南北九条の、方格に道路の通る整然とした計画都市である。東側を左京、西側を右京と呼び、左京の東にはさらに三坊分の張り出し部分があった。京の北端中央の平城宮には大極殿をはじめ、天皇の起居する内裏、役人たちの政務の場である朝堂、および宴会の場である東院庭園などの、瓦屋根と朱塗柱の建て物が立並び、周囲を築地回廊が囲んでいた。

平城宮の南の正門が朱雀門、ここから京師の中央を道幅約70米の朱雀大路が南に伸びて、南端の羅城門まで続いていた。この大路は外国からの使節に見せつけるため、ことさらに立派に整備され、常に真っ白に塗られた築地塀、塀ごしに黒々とした瓦屋根が連なる貴族の豪壮な邸、その向こうには大安寺や薬師寺に代表される大寺院の塔が朱色に照り輝いていたのである。



朱雀門は一階建てだった - - という説があるのを新聞で知りました。10年ほど前に二階建ての堂々たる建物で復元されたあの朱雀門です。いまさらあれは本当の姿ではないといわれても - - - と言いたくなるんですが、奈良時代のことは、まだまだ分からないことも沢山あるようです。

大極殿にも謎があります。大極殿は天皇の即位や元日朝賀などの国家的儀式、あるいは外国使節の歓迎の儀式が行われる重要なものですが、実は平城宮には大極殿が二つあって、今回復元された朱雀門からまっすぐ北に位置するものが第一次大極殿、その東に今は基壇だけが復元されているものが第二次大極殿と呼ばれています。

「でも、小学校の遠足の時に平城宮址に来た時は、平城京大極殿址は一つだけでしたよ。二つもあるなんておかしいです、間違いです。それはきっと許されないことですよ」

そうですね。失礼ですけど小学校の時というのは、もう随分昔の話でしょう。そのころは確かに東側の第二次大極殿と呼ばれているほうだけで、中央の大極殿址は後から発見されたんです。実は、平城京大極殿は、ある時、第一次の場所から第二次の場所へ移設されたんです。

「ウソですよ。あんな大きなものを移設するなんて、おかしいです、間違いです、それは絶対に許されないことですよ」

平城京大極殿が、奈良盆地を南北に貫く下つ道の北端にその雄姿を見せるのは、平城遷都から5年後の715年のことである。この年の10月3日に元正女帝が即位する。女帝は真新しい玉座に座り、広大な前庭に控える百官の官人に傳かれ、大礼の詔を述べた筈である。この時には、おそらく大安寺や薬師寺の官寺をはじめ、平城京はまだ建設途中だったと思われる。

次に大極殿で即位式を行ったのは、724年、聖武天皇の時である。5年後に「天平」への元号改変を控えるこの当時は、おそらく平城京が最盛期を迎えていた頃だが、これが第一次大極殿の最後の即位式となった。輝ける天平時代が終焉を迎え、749年、聖武天皇の後を受けた孝謙女帝が大礼の詔を発したのは、今礎石だけが残る、東側の第二次大極殿だったのである。

「平城京大極殿と歩廊の一部を壊して、恭仁京へ運ぶ」

天平時代末の741年、都は平城京から山城の恭仁京、さらに信楽の飯宮、難波の宮へと移転を繰り返すことになる。そして再び平城京に天皇の玉座が戻るのは5年後の746年。原因はよく分かっていないが、疫病と天災、さらには藤原広次の乱が聖武天皇の精神を乱し、平城京を呪われた地として捨てさせたといわれる。「続日本紀」は恭仁京へ都が移される時、大極殿だけは移設したと伝えており、近年の発掘成果は、平城京大極殿と恭仁京の大極殿は同じ大きさで、平城宮址の大極殿址と一部の回廊址には、移設された形跡のあることが確認された。

確かに、平城京大極殿は、平安の地を求めてさ迷った聖武天皇とともに、大和と山城の地を、往還していたのである。

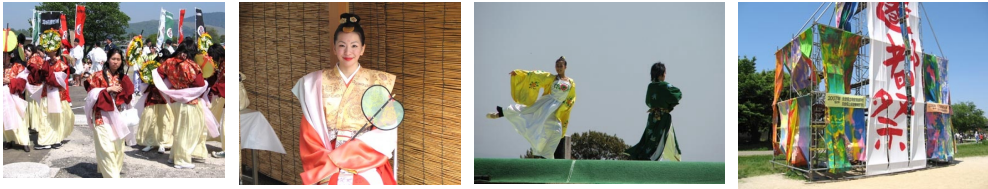
「それで、羅城門はどうなったんです」

えっ？、突然話が変わりましたが、羅城門ってあの朱雀大路の南端、平城京のはずれ、九条大路に建てられていた羅城門ですか。

「ええ、朱雀門や大極殿が立派に復元されたのに、羅城門はどうして復元されないんです。おかしいです。間違いです。それはきっと許されないことです」

ウン、と言われても、羅城門があるのは、実は大和郡山市になるんです。九条の佐保川の傍に公園があって、そこに羅城門址の大きな石碑が建っています。

僕も大和郡山市民ですから羅城門の復元には大賛成なんですが、復元しようにも羅城門がどのような形だったのかよくわからないんです。羅城門は掘立て柱の板塀で、みせかけだったという説もあるし、それに羅城門と羅城が成立したのは、都が恭仁京への遷都を経て、再び平城京へ戻った後の750年頃、天平時代には、まだ羅城門はなかったんです。だから、そのころはもう中央の大極殿は移設されてなくなっていたはずだから、朱雀大路を中心にして、北から大極殿、朱雀門、羅城門が並んでいる平城京の模型は、嘘っぱちだと思いますね。



写真は「遷都祭」のプレイベントが平城宮址で開かれた時のものです。擬似市の催しに大道芸や紙芝居、それから天平風俗行列や古代衣装の舞踏イベント。

遷都際のテーマは「色」。僕は青い芝生に座って大極殿址の基壇の上で華やかに催された舞踏イベントを眺めている。抜けるような青空に吸い込まれる古代衣装の色、色、色。それから新緑の樹幹に見える天平風俗の女性たちの色、色、色。

「つややかな真珠色の練絹の上着に鶉(とび)色の袖なしを重ね、縹(はなだ)色の裾(もすそ)を覆いて、紵錦織の帯を胸高に締めている」

これは歴史小説から拾った天平時代の女性の服装の描写です。真珠色やとび色というのはなんとなくわかるけど、はなだ色というのはどんな色なんだろう。でもなんとなく素敵な色が浮かんできますね。天平時代はこんな素敵な言葉の色で溢れていたんでしょうか。

春になって「遷都祭」が始まったら、僕はたくさんの素敵な色を探しにいきたいと思っています。

元日に 家族そろって顔を合わせ おめでとう、と挨拶したら。

そこでああなたは どこからおいでになりましたか、と

尋ねあうのも良いことです。

石垣りんさんの詩、「新年の食卓」の一部です。何となく考えさせられますね。どうですか。何か一言、えっ？、もう正月は終わった？、そうですか、それでは、とりあえず、今年もメダタシ、メダタシ。